

生田花世の作品と人生にみるフェミニズム思想  
——理念と現実の狭間で——<sup>1</sup>

菊地利奈

はじめに

本稿は、鳥取県立図書館が発行している『郷土出身文学者シリーズ』で「女性号」を組むということになり依頼を受けた、生田花世（1888-1970）の文学活動についての原稿がもとになっている（2017年3月刊行予定）。『郷土出身文学者シリーズ』が中学高校生をも対象とした「読み物」であること、脚注や文末注が使用できないこと、原稿枚数の制限などの理由から、さまざまな変更や削除が生じたため、脚注や引用を含めた論考として記録し、現在すすめている花世の戦中の執筆物についての研究への足掛かりとなるよう、ワーキングペーパーとして発表するものである<sup>2</sup>。

鳥取県立図書館からの依頼を受けたことをきっかけに、花世の評価に対する数々の疑問が浮かんできた<sup>3</sup>。①花世は鳥取出身ではない。鳥取出身であるのは花世の夫（あるいは花世の言葉を借りれば「共同生活者」）であった生田春月（1892-1930）であり、今回の『郷土出身文学者シリーズ』に花世が含まれることになったのは、「鳥取出身の春月の妻、花世」である。＜フェミニスト＞として『青鞥』や『女人藝術』で活躍した花世にとって、これは果たして喜ばしいことなのだろうか、という疑問。②果たして、花世は文学者としてとらえられるべきなのか、それとも、女性解放運動家としてとらえられるべきなのか。多作であった花世であるが、その作品の文学的完成度は高いとはいえない。むしろ、花世作品における「文学」とは、フェミニズムを主張するための媒体と定義したほうがふさわしいといえる。とすると、花世の作品は文学史上「無価値」ということになってしまうのか、という疑問。③多くの女性解放運動家は、戦中、戦争協力者として＜日本女性＞を啓蒙した。花世の戦中の出版物も、『輝く

<sup>1</sup> 本稿は、科研（15K01915 及び 15KK0049）の戦前戦中の女性文学に関する研究の一環として発表するものである。

<sup>2</sup> 本稿では、生田花世と生田春月との識別を容易にするため、作家名は姓ではなく名で統一して記載する。

<sup>3</sup> 鳥取県立図書館の判断を批判するものではない。生田花世は死後その活躍が語られることが少なく「忘れられた作家」のひとりでもあるので、どんな形でも花世の文学活動を取り上げていこうとする動きは歓迎したい。花世に関する諸問題について考えるきっかけを与えてくれた鳥取県立図書館の企画には深く感謝している。論文執筆にあたっては、鳥取県立図書館に資料収集にもご協力いただいた。ここに厚く御礼申し上げる。

人柱』(昭和16年)や『活かす隣組』(同)など、一目で戦争協力作品だとわかるものになってゆく。この「変容(転向)」ぶりはどうしたことなのか。それとも、これは客観的にみると「変更(転向)」したようにみえるが、本人のなかでは一連の流れがあり「フェミニスト」として納得がいくものであり、「変容(転向)」とは自覚されない類のものだったのだろうか。花世を手掛かりに、当時の女性運動家たちの思想や考えの変容(転向)をさぐることは可能なのか。④花世作品に限らず、当時の「女性解放運動」に関連する議論で問題提起されている内容には、現在も問題視されているものが多い。仕事と家庭を両立する女性の負担の大きさ、夫の不倫や浮気に耐える妻の悩み、自立したいと望む女性を社会が拒む、働く<職業婦人>と家庭の主婦の憎しみ合いともとれるような論争、託児所に子どもを預け働く女性の良心の呵責、職場における男性上司によるセクハラに泣く女性、など。当時のフェミニズム思想に基づいた文芸誌の内容は、現代の女性週刊誌とさほどかわらない。これは「100年たっても日本社会の男尊女卑度は変化していない」ということを示しているのだろうか。当時と今の大きな違いは、戦前までの女性(文芸)誌では、「男性をやっつけましょう」「女性よ羽ばたけ」とみなが口に出してははっきりと述べていることであろうと思う。現在このような訴えが声高に聞かれないのは、現代女性の社会的地位がそこまで低くなくなったからこそその現象であり、<喜ばしい成果>だと考えるべきなのか、あるいは、声高に論じても変化がないことに女性側がつかれ、声をあげることさえもあきらめたことを示すのか。

本稿では、これらの問いを念頭においたうえで、花世の長い生涯を追い、生田花世というひとりの女性文筆家の人生を、「フェミニズム思想家」、「文学者(文学作品や随筆等を書く者)」、そして<あたらしい女>の理想をめざし理想を追いかけて生きた「ひとりの女性」の三つの側面から読み解きたい。

## I. 生田花世はなぜ「生田」なのか

詩人石垣りん(1920-2004)が、「ハタから表札をかけられてはならない／石垣りん／それでよい」と「表札」という詩を出版したのは、1968年だ<sup>4</sup>。21世紀になった今でも、女性にとって自分の名前を看板に生きていくことは容易ではない。明治時代から昭和初期にかけて文学界で活躍した女性をみると、与謝野晶子(与謝野鉄幹の妻、1878-1942)、中野鈴子(中野繁治の妹、1906-1958)、森三千代(金子光晴の妻、1901-1977)など、「妻」や「妹」といった説明が目

---

<sup>4</sup> 石垣りんの散文「立場のある詩」(1967年11月)から推測すると、「表札」という詩自体は1966年に発表されたものだと思われるが、初出確認が取れないため、ここでは「表札」という詩が収録された詩集『表札など』が出版された1968年を発表年としている。

に付く。妻や妹でなければ、「愛人」や「恋人」、「未亡人」という場合もある。モダニズム詩人として評価が定着しつつある左川ちか（1911-1936）も、「伊藤整の恋人」だった。花世が敬愛した詩人・深尾須磨子（1888-1974）は、死んだ夫の詩の編集をして夫の詩集を売り出す、という形で詩壇にデビューした。

生田花世も、詩、短歌、小説（短編）、随筆（エッセイ）、評論と、さまざまなジャンルで次々と作品を発表し、『青鞥』をはじめとする女性文芸誌で活躍したが、美男子でロマンティックな詩を書く生田春月の「妻」としての「肩書き」のほうが、花世＝作家（あるいは詩人、歌人、評論家、女性解放運動家）としての肩書きよりも有名だ。『文章倶楽部』のアンケートによると、大正9年から12年にかけて、春月は夏目漱石を凌ぐ人気があったということであるから<sup>5</sup>、知名度の差でこうなったのであろうか。そうだとしても、現在では春月の名を知る人も少ないであろうに、いまだに花世は「春月の妻」という呪縛から逃れられないのはなぜなのか。

花世は、努力家で勤勉、人望も人徳もあった。思想家・平塚らいてう（1886-1971）や劇作家・長谷川時雨（1879-1941）<sup>6</sup>、詩人・深尾須磨子といった、当時、文壇で活躍していた女性たちに信頼をおかれて活躍した。らいてうといえ、日本のフェミニズムを代表する『青鞥』を発行した青鞥社の創設者。『元祖女性は太陽であった』の著作で誰もが知るフェミニストだ。時雨も「女性による女性のための文芸誌」である『女人藝術』の創刊者である。須磨子は戦中に「全日本女詩人協会」を結成し「女性（詩人）の団結」を盛り立てた。共通項はフェミニズム運動家・思想家としての強い信念だ。21歳の時に、徳島の田舎から単身上京した花世は、華々しく活躍するこれらの女性にあこがれ、『青鞥』に加わる。「女は女であることの不自由から解放され、自由に生きるべきだ」と信じてのことであった。

結婚数年後に、花世は自らの結婚観について次のように述べている。「文筆をもつものは例外なく、『自分』の特殊性に生きる。夫をもっても夫は夫だし、自分は自分である。帯のちがうように二人はちがう、個性がちがう。従つて、文字も、思想もちがう」と人間の「個」を主張<sup>7</sup>。そして、だからこそ、らいてうや時雨など、結婚しても姓をかえない女性が文壇には多いのだと、夫婦別姓に言及している。1916年のことであるから、花世は進歩的な考え方の持ち主であったように思われる。

---

<sup>5</sup> 尾形ゆき江『わたしの生田花世像』21頁

<sup>6</sup> 花世と時雨については、拙論「『女人藝術』と生田花世」（彦根論叢 No393）参照のこと。

<sup>7</sup> 「未亡人という名」（『未亡人』より）、引用は『生田花世讀本』に採録された『未亡人』の抜粋より（166-167頁）。

では、このような信念を持った花世が、旧姓西崎を捨て「生田」をあえて名乗ったのはなぜなのであろうか。結婚当時、生田春月は詩人としてはまったく無名であり、生田と名乗ることによる文壇での利益はまったく考えられない。仕事上のメリットは皆無であるばかりか、それまで誌上で「西崎花世」の名で発表していた以上、「生田花世」と名乗りかえることはむしろ不利益でしかなかったはずだ。そのうえ、花世と春月は「結婚」後も籍を入れていない。今でいういわゆる「事実婚」である。花世はこれを「結婚」ではなく「共同生活」と説明した<sup>8</sup>。花世は籍については<新しい女>の理念を適用したにもかかわらず、あえて「生田」姓に名乗りかえたのだ。

私には、「生田」という姓を選択した花世の行動に、女に選挙権はおろか、女は父や家や夫の所有物であった時代に、<新しい女>として、自立した人間として生き抜こうとしたひとりの女の葛藤と矛盾が、凝縮されているように思われる。花世の理想は、<新しい女>であった。花世は、女性を啓蒙する作品を数多く執筆し、才能をいかし文学界で活躍したいと夢見る若い女性たちを育てもした。林芙美子（1903-1951）がデビューした『女人藝術』も、花世が縁の下の力持ちとして奔走し支えた雑誌だ。自分自身も<新しい女>の理念に従って生きようとしていたかにみえる。しかし、花世は<新しい女>になりきれない部分をも抱えていた。それはたとえば、結婚できないと思っていた容貌がすぐれない自分が若い美男子からプロポーズされうれしくてたまらない、なんとかしてこれを「自慢したい」というような感情の部分である。ハンサムな春月から熱烈な恋文をもらい求婚されたことにより、女としての価値があがったかのようにふるまう、花世の<古い女>の部分と、<新しい女>への憧れとが、花世の中には混在しているのだ。その<古い女>の部分が、宮本百合子（1899-1951）などが花世の性格について指摘した、花世の「女らしいねちっこさ」であったのだろう。そして、その<古い女>の価値観が、花世に、文筆家としての「西崎」を捨てさせ、「生田」と名乗らせたのではないか。姓を変えることが、最も早く広く簡単に、自分が結婚した（できた）ことを自分の外見を馬鹿にしていた女仲間たちに知らしめ自慢できる方法だったのではないか。

本来ならば、若い女性たちの社会進出を支援した花世自身の評価が「春月の妻」であるということは、本末転倒であるはずである。また、本当に春月との生活が、花世にとって「文学をめざすもの同士の共同生活だった」というならば、花世はそもそも「妻」ではなく、「生田」の姓を名乗る必要性などまったくなかったはずである。にもかかわらず、春月に何度浮気をされても、花世は「生田」の姓を捨てなかった。春月が、他の女との不倫旅行の末に、ひとり投身自

---

<sup>8</sup>『わたしの生田花世像』37頁

殺をし、新聞をにぎわした後も、である。春月の死後も、「生田」はペンネームなので姓は変えない、名を変えれば「生田花世」の功績が失われる、郵便が混乱するなど主張し、生涯「生田」を貫いた。花世が生田になることなく、旧姓の西崎で執筆活動を一環して続けていたならば、花世が「春月の妻」という肩書きに埋もれることはなかったかもしれない、と思う反面、「春月の妻」という肩書きこそ、実は花世が望んでいたものなのかもしれない、とも思う。後者であれば「フェミニスト花世」の理念と相反するわけであるが、理想と現実、あるいは理念と感情の矛盾こそが、等身大の女性を描こうとした、「生田花世」の作品の特徴であるといえるだろう。

## II. 矛盾の根源——故郷・家族という名の呪縛

花世は、明治21年10月14日<sup>9</sup>、徳島県板野郡泉谷に生まれた。旧姓西崎。三百年続く旧家だったという。父安太郎は小学校の教師で漢学者でもあり<sup>10</sup>、村長もつとめたとの説もある<sup>11</sup>。

花世の運命は生まれたときに決定された、ともいえるエピソードがある。花世が生まれたときに、安太郎が「容姿美ならず、然れども『花世』と名付」けたこと<sup>12</sup>。そして、「書を読みて世に尽くすべし」と願い、娘に教育をほどこしたことである。はじめてのこどもが生まれたときに、美人ではないと感想を述べる父親に違和感を抱かなくもないが、父は娘を大事に育てた。花世の下には、弟が5人、妹が2人生まれたようだが<sup>13</sup>、花世は「女であるにもかかわらず」弟妹の中でもっとも高い教育を与えられた。しかし「容姿美ならず」しかも一四五センチと背が低いことは、生涯、花世のコンプレックスとなり花世を苦しめた。花世が、春月からの熱烈プロポーズに舞い上がったのも、この容姿に関するコンプレックスが一因だったのではないかと思われる。その一方で、花世は、もうひとつの父の願いも叶えた。文学を通して世のため人のために尽くそうと、生涯努力したのである。

私は、花世の伝統的な女の役割にしばられる側面について、その根源が故郷（家族）にあったのではないかと考えている。これは、故郷や家族に問題があったということではない。むしろその逆である。花世は愛されて育ち、常に、故郷と故郷の家族に感謝をし、恋しく思っていた。この故郷との絆が花世の「古

---

<sup>9</sup> 『未亡人』など、複数個所で、花世自身は自身の誕生日を「10月15日」と語った（『生田花世読本』160頁他）が、ここでは、複数の評伝が「15日」としていることに沿う。

<sup>10</sup> 『生田花世読本』274頁

<sup>11</sup> 『断髪のモダンガール』121頁他。

<sup>12</sup> 『生田花世読本』274頁

<sup>13</sup> 弟妹の数については諸説があるが、ここでは『生田花世読本』の年譜に沿う（315頁）。

い女」の考え方につながったのではないかと、私は考えているのである。

花世のおいたちをみてみたい<sup>14</sup>。花世の家は佐藤や藍玉の製造をしていた旧家であったが、花世自身の回想によると、祖父の代から暮らしは苦しくなり、父安太郎が相続した頃には借金が残されていたという。花世が十歳をすぎるところからは、常に暮らしは苦しかったようだ。尋常小学校、高等小学校とすすんだ花世は、十六歳のときに、徳島市に新設された県立高等女学校へ進学する。女学校で勉強するには、かなり裕福な家庭に育たなければいけない時代、女学校への進学率はわずか2.8%だった時代のことである<sup>15</sup>。花世はどうしても進学したく、血判を押した嘆願書を父に渡し、進学を許してもらった。

明治、大正、昭和初期、花世が文筆家として活躍した同時期に文筆業で活躍した女性を見てみると、与謝野晶子も、平塚らいてうも、長谷川時雨もみな、裕福な家庭で育ち女学校や女子大学で学んだ、いわゆる裕福な家庭の「お嬢さん」だ<sup>16</sup>。花世からみれば、『青鞆』で活躍する女性たちは「見れば上流階級のお嬢さんの集まりで」、「[らいてうは] 美貌に加えて知力にも財力にも恵まれ、希望するかぎりの勉学を続けられた別世界の人」(78頁)だったと、戸田房子は言及している<sup>17</sup>。尾形ゆき江が指摘するように、「女が学問し、文学を志すには、家庭の進んだ理解と財産に恵まれなければならない時代であった」のだ<sup>18</sup>。花世は地方旧家の生まれではあるが経済的には恵まれず、後者の条件は満たすことができなかった。その一方で、前者の条件には恵まれたといえる。女性が文学作品を読むだけでたしなまれ、多くの少女たちが家族に隠れてこっそり文学雑誌を読んだ時代、詩人や作家になりたいと夢を抱いた女性たちが家出同然で東京に向かった時代<sup>19</sup>、そんな時代に、花世の両親は、向学心に燃える花世を理解

---

<sup>14</sup> おいたちについては、『わたしの生田花世像』『詩人の妻 生田花世』『青鞆人物事典』など複数書籍を参照、総合的に判断した。

<sup>15</sup> 『青鞆人物事典』16頁。

<sup>16</sup> 『青鞆』に投稿したり読み手であったりした女性たちは「中流」であり「上流のお嬢さんたちではなかった」という説もあるが(『青鞆人物事典』)、当時、文筆家の多くは、男女ともに「エリート(学歴が高い)」であったことは否めない。だからこそ、そうではない文筆家たちが文壇内で大きなコンプレックスを抱えたのであろう。そして高等教育をこどもにさずけられる家庭の出身であるということは、やはりそれなりに経済力のある家に育ったということになる。

<sup>17</sup> 『詩人の妻 生田花世』77頁及び78頁。

<sup>18</sup> 『わたしの生田花世像』13頁

<sup>19</sup> 花世が家出して上京したとの記述がみられることもあるが(『わたしの生田花世像』14頁他)、花世が東京で一旗あげて弟を呼び寄せることを約束していることや、春月の浮気が発覚したときに徳島の実家に戻っていること、父が死に心細かった母が上京を「内諾してくれた」と花世自身が回顧していること(『未亡人』)、他にも、本稿で後述するように、花世が母に東京へ行くと告げると、悪いことさえしなければ「たとえどこで[花世が]死んでも母は泣きません」と答えた(『詩人の妻 生田花世』67頁)というエピソード等

し支援した。

女学校を卒業した花世は小学校に短期間勤める。その頃には『女子文壇』（1905 - 1913 年、132 冊を刊行した文芸投稿を主体とする月間雑誌）に花世の新体詩や散文が毎号のように掲載された。当時、詩人や作家をめざすものは、男女にかかわらず、このような投稿文芸誌に投稿し、名が知れ渡ったら上京するというパターンが多かった。花世も、次々と自分の作品が掲載され、東京にでて文学で生きていきたいと思うようになったのだろう。父亡き後、没落した家に母と弟たちを残し、「命がけであり死にゆくことでも」あるとの覚悟で、上京の意思を母に告げる<sup>20</sup>。膨大な借金を残して父親が死に一年足らず、祖母、母、弟妹の生活が、花世の小学校教師の月給 15 円で支えられていたときのことである<sup>21</sup>。母は「悪いことや家名にかかわることさえしなければ、たとえどこで〔花世が〕死んでも母は泣きません。お前が行ってしまっても、飢え死にはせぬ」と答え、花世の文学への心差しを否定せず支えたという<sup>22</sup>。花世がこの母親に感謝しなかったわけがない。東京で成功し弟たちを呼び寄せなければ、と花世が強く使命感を持ったのもこのような家庭背景があつてのことだろう。

母カヲリは、上京した花世が春月と結婚すると連絡するとなんとか工面して 10 円を送ろうとし<sup>23</sup>、紋付羽織を仕立てなおして贈りたいと手紙に書いて祝福するなど、上京後も花世へ愛情ある配慮をみせる<sup>24</sup>。また、結婚後、春月の浮気に悩み苦しむ花世には、「あんまりみじめな辛抱はしなはるな。東京が辛すぎるならいつでも国へ帰って来なはれ。〔中略〕死にたいと思っても死んではいかん」と書き送っている<sup>25</sup>。この慈悲深い母にどれだけ花世が支えられたか。花世が故

---

から、花世の上京には家族の理解があつたと私は考える。これも本稿に後述するが、春月の浮気に悩む花世に、母から「どうぞあんまりみじめな辛棒はしなはるな。東京が辛すぎるならいつでも国へ帰って来なはれ、母さんと一緒に蚕を飼うても一生仕合せに送れるところ思つて死にたいと思つても死んでもいかん」と手紙を送っており、上京には母の理解があつたとするのが妥当であると考え（手紙部分は、和田艶子著『鎮魂 生田花世の生涯』51 頁より引用）。上京後の花世が、母に送金していたというエピソードもある（『詩人の妻 生田花世』70 頁）。他にも『未亡人』で、花世自身が「母は〔花世の上京〕心細いわけだつたが、内諾してくれた」と記載している箇所もある（『生田花世讀本』177 頁）。花世本人の回想に依存しているため、美化された部分があることは否めないかもしれないが、少なくとも、上京後も家族との交流が普通におこなわれていたことから、家族を捨てての上京とまでは言えまい。

<sup>20</sup> 引用は『鎮魂』14 頁より。同様のエピソードが『詩人の妻 生田花世』53 頁にもある。

<sup>21</sup> 『生田花世讀本』収録の「略伝」に花世の当時の俸給が 15 円であつたことが記されている（276 頁）。

<sup>22</sup> 『詩人の妻 生田花世』67 頁

<sup>23</sup> 15 円を送つたとの説もある。

<sup>24</sup> 『鎮魂』40 頁

<sup>25</sup> 同書 51 頁

郷徳島を常に懐かしんで暮らしたのも、家族との深い繋がりがあってこそだろう。しかし、同時に、この故郷とのつながりが、花世が抱えた〈新しい女〉になりきれない、理想と現実とのギャップ、あるいは矛盾になったのではないか。花世は、〈新しい女〉になりたいと強い憧れを抱きながら、家族を経済的に支えるためには自らの貞操も捨てる、家族のための自己犠牲精神に満ちた性格であった。弟のためには埋め草になって犠牲にならんとし<sup>26</sup>、夫の出世に尽くし「服従して」生きていきたいと願う<sup>27</sup>、〈新しい女〉の理念とは相いれない花世の矛盾の根源は、故郷に残った家族とのつながりだったのではないかと私には思われてならない。

### III. 東京生活——〈新しい女〉に憧れて

花世が単身上京したのは、21歳の春であった。明治43年、東京に出てすぐに小学校の教師としての職を得られた花世だが、生徒や保護者から「背の低い不細工な田舎者のおんな教師」と蔑まれる<sup>28</sup>。故郷徳島で「先生様」と尊敬されていた花世はこのギャップに苦しみ、半年足らずで教師をやめてしまう。戸田房子は、上京後すぐに職にありつけた花世は、次の仕事もすぐに決まると思っただのではないかと指摘する<sup>29</sup>。死ぬ覚悟で東京にでた以上、故郷でもできた小学校教師をしているだけでは意味がなく、文学の道に挑戦したいという野望もあったであろう。

しかし、明治から大正に移り変わろうという、今から百年前の東京での生活が、田舎からひとりでてきた若い女にとって、そう甘いものであるはずがない。その後、花世は住み込みの女書生、雑誌の訪問記者、カフェの女給、寄席の女中など、不安定な職を転々としながら、飢え死にするか生き延びるか、生活苦と戦う日々を続けることになる。さらに、弟のひとりが、花世を頼って上京。上京の際、きっと東京に呼び寄せると約束していた花世は、なんとしてでも弟を養わなければと自らを追い詰めていく<sup>30</sup>。そんな折に、勤めていた会社の社長から「相談に乗りましょう」と声をかけられ、夕食に誘われ、そして、花世はこの男に処女を奪われる<sup>31</sup>。あるいは、このセクハラ社長に処女を捧げることで安定した職を得ることを花世は選択した、と言い換えてもいいかもしれない。

花世はこの体験を、1914年（大正3年）に文芸誌『反響』9月号にて「食べ

---

<sup>26</sup> 『鎮魂』14頁

<sup>27</sup> 同書41頁

<sup>28</sup> 『詩人の妻 生田花世』70頁他。

<sup>29</sup> 同書70頁

<sup>30</sup> 花世自身の「食べることと貞操と」をはじめ、花世の回想と感想文（告白的体験談）を総合すると、このような解釈になる。

<sup>31</sup> このセクハラエピソードについては、花世の「食べることと貞操と」を基盤にしている。

ることと貞操と」として発表し、いわゆる「貞操論争」を巻き起こす発端となった。貞操論争とは、墮胎論争と廃娼論争と並ぶ、『青鞥』の三論争のひとつである<sup>32</sup>。この「食べることと貞操と」は、仕事をしたいと向上心に燃える若い女性に、同じような境遇に合ったときのためにと、老婆心から助言する形式がとられたエッセイ風の散文だ。その若い女性に、花世であろうと思われる「私」は、「あなたは逃げられてよかった」「私は去らなかつた」と語りかけ、ふたり涙する、という筋書きになっている。体験談を踏まえた「助言的文章」ともいえる、このような告白的スタイルは、当時の流行でもあった。作中の若い女性は「逃げた」けれど、作中の「私」、つまり花世自身は逃げなかつたのではなく「去らなかつた」という表現の違いは、逃げることは可能であったかもしれないが、本人はその場を立ち去らなかつた、つまり処女を売って仕事を得ることを選択した、という意味表示ともよみとれる。

作中で花世は、貧困のどん底にある、ただただその日を生きるためにどんな仕事でもしなければならぬ若い女性は、常に貞操の危機にあると警笛をならす。自分のような不美人な女でもそうなのであるから、美しい女はなおのこと、女性に厳しい社会の在り方を非難もする。飛び降りるしかない岸壁にたたされた気持ちで男と寝たと涙ながらに語る「私」（という名の花世）。花世は自らの体験を赤裸々に描くことを、このような不幸が女性にはあると社会に訴える手段とした。

花世の意に反して、この花世の告白的感想文は、<新しい女>を名乗る『青鞥』仲間の女性たちに嫌悪を抱かれ、激しい非難を浴びることになる。『青鞥』仲間の安田皐月（1887-1933）から、生活の糧を得るために貞操を失うくらいならば「死んだほうがまし」とまで罵られた花世は、女が処女を大切にするのは、結婚の条件を有利にするためであり、つまりそれはよりよい生活と糧を得るためではないかと反論するが<sup>33</sup>、反論すればするほど理解が得られない状況に陥ってゆく。

なぜ花世は理解されなかつたのか。ひとつには、<新しい女>たちが、ひとこと言えば、お嬢さん育ちであつたせいだろう。みながみな裕福だつたわけではないだろうが、それでも、花世のように今日の糧もないような生活苦を体験した女性は、高い教育を受けた女性運動家の中にはいなかつたのではないか。花世を反撃した安田皐月は、対面した花世の哀れな容貌に絶句し、何も言う気になれなかつたというエピソードも残る<sup>34</sup>。そのような女性らには、花世の置か

<sup>32</sup> 『青鞥人物事典』223頁

<sup>33</sup> 「周囲を愛することと童貞の価値と」（『反響』大正4年新年号）

<sup>34</sup> 花世と「貞操論争」のエピソードについては『詩人の妻 生田花世』45-60頁参照。花世の側からみると、実家から独り立ちして都内に菓子屋を開いていた皐月は「裕福な奥さ

れた、体を売らなければならないほどの貧困生活を理解し同調することは困難であったのではないか。花世のほうでもそのような経済格差を痛感してか、「あなたと私とは生きている世界が違います」と、論争に蹴りをつけた。

また、この論争では、食べてゆくために処女を売るというテーマそのものよりも、食べてゆくために処女を売った自分の判断を、弟との東京生活を支えるためにいたしかたなかったと花世が弁明したことにより、弟のために体を売った自分を正当化し、弟を言い訳にしていると、女性の反感を買った向きもある。平塚らいてうは「男子に同感され同情されそうな文章」と批判し、伊藤野枝（1895-1923）も花世の体験を「いたましく思う」としながらも、「物を書き、道理の解る方〔花世〕が、なぜもう少し考えられなかったのか」と「貞操についての雑感」（『青鞥』2月号）で述べている。

花世の「食べることと貞操」には、花世の二面性がにじみ出ている。女が仕事を得ようとしたら、処女を売ることも辞さないということ自体は、＜新しい女＞の姿であるようにも見えるが、その行動は家族のために身を売ることを美德とする＜伝統的な女＞の考え方に支えられている。花世は、伊藤野枝のように、男に童貞が求められないのであれば、女に処女が求められるのはおかしい、と不平等を訴えているわけではない。花世の問題提起が貞操の是非を問う貞操論争に発展したことは、花世がもくろんだことではなかっただろう。この告白的感想文の本来の目的は、自己弁護でも貞操の重要性を論じることでもなく、女性が社会に進出するにはセクハラは避けて通れない社会のあり方に対する批判であり、そんな社会に負けないように、同じような不幸がほかの女性に起きないように、自分に続く、若い女性たちに警笛をならす、「助言的散文」だったのではないだろうか。

貧乏で苦労人として名高い女性作家に、『放浪記』で1928年（昭和3年）に文壇デビューした林芙美子がいるが、花世は芙美子よりも十年以上も前から赤裸々な告白文で女の苦労や不幸をあばき、女性解放運動に貢献していたことがわかる。付け加えれば、芙美子を『女人藝術』の編集室に連れてきたのも花世であった<sup>35</sup>。その後、芙美子は『女人藝術』に「放浪記」を連載することが決まり、一躍文壇デビューを飾ることになる。花世の人生に「なんとなくパッとしない」印象を持つ人も多いようだが、それは、人の世話をして成功を助けなが

---

ん」に見えたのであろう。しかし、臯月自身も「裕福で幸福な奥様」であったとはいえない。病気を理由に結婚を破断にされたり、息子に大病させ障がいを負わせたり、さまざまな苦難に遭い、1933年に自ら命を絶っている。

<sup>35</sup> 尾形明子「もうひとつの女性文学史—生田花世を軸にして」（『生田花世展図録』2頁）

ら自分の名声には無頓着であった、花世の縁の下の力持ち的な生き方のせいかもしれない。

田舎者であか抜けず、粗末な着物で生活苦に悩む花世には、『青鞥』や『女人藝術』で活躍したモダンガールの華やかさはない。しかし、花世の作品には、「新しい女」に憧れながら、「新しい女」になりきれない等身大の花世が描かれる。自分のめざす理想の〈女性像〉と実際の自分の行動や感情との間のギャップに悩みながら、女性に厳しい社会の中で人生の苦難と戦いながら自分らしく生き抜こうと奮闘する女性、この現実的な女性像が花世文学の魅力なのではないだろうか。

#### IV. 電撃結婚

女仲間の間でも不器量でみすぼらしいと陰口をたたかれた花世が、4歳年下の美男と出会って2週間後、1914年（大正3年）3月5日に結婚した。花世は27歳。美しくもなく、年上の、しかも処女でもない自分に、会ったこともない若い男から、熱烈なラブレターが届き求婚されたのであるから、内心、花世は舞い上がっていたに違いない。花世は、このハンサムな文学青年、生田春月から5700字にもわたる恋文をもらい、プロポーズされる。春月は、花世の辛い境遇についての告白文を読み、苦労に苦労を重ねる花世を、自分の愛すべき女性だと確信したというのだ。「我汝を愛す」と、見たこともない花世宛に書きだされた恋文が有名なのは、結婚後すぐに、その内容のすべてが花世によって『青鞥』に転載されたからでもある<sup>36</sup>。

花世の文章を読み、探していた「愛すべき女」を見つけたと信じた春月は、この恋文を持ち歩き、河合翠明を仲介にして、生田花世に会い、その二週間後に、ふたりは結婚生活を始めるのだ。この春月の行動は、若気の至りとしかしいようがない。鳥取から文学を目指して東京に出て苦学していた春月は、同じように田舎からでてきて苦学していた花世を理想だと思ったのであろうか。結婚後、2カ月足らずで、春月はこの結婚を後悔しはじめ、後悔は春月が自らの命を絶つまでの16年間、続くことになる。

この結婚は、春月だけでなく、花世にとっても不幸なものであった。花世が「自分のような女に熱烈に求愛してくれた」春月に尽くしたいと思った女心は理解できなくはない。しかし、花世が「自分のような女に熱烈に求愛してくれた、この若い男性を支えていかなければ」と感じたこと自体が、不幸な結婚生活の始まりであったのではないか。春月は、どんな不幸な境遇にも負けず文学を目指そうと奮闘する、「文章の中の花世」に、自分が愛する女性像をみたのだ

<sup>36</sup> 『青鞥』4巻5号（大正3年5月号）

と思う。その一方で、現実の花世自身は、そのような「理想」を掲げながらも、そのような新しい女にはなりきれない女だった。その証拠に、花世は結婚が決まったとたんに、「これからの私は養はれて生きる女となりますから」と申し出て、今後は文筆もやめ、「これからの私はあなたに服従してゆく人間でありたい」と希望を述べる（実際には、花世は筆を折らず、結婚後ますます執筆する）。戸田は、この時の花世の心境を「そうだ、私はあの青年〔春月〕の若い命を育てるのに、今後の生涯をささげよう。私の醜悪と無智を許してくれた彼に、私は身を粉にしても報いたい」と表している<sup>37</sup>。処女ではなく、美しくもない自分に求婚してくれた、という考えは、フェミニスト伊藤野枝が「貞操に就いての雑感」で指摘したように、男女不平等で男尊女卑的な思想に基づいている。花世に混在する＜新しい女＞と＜古い女＞の二面性はここにもあらわれている。

大正デモクラシーの大きなうねりの中で、男に媚びず、才能を生かし活躍する＜新しい女＞の姿は、多くの少女・女性を魅了した。花世もそのような女のひとりであり、＜新しい女＞に憧れた。その信念に基づき、花世は自分の結婚の条件に処女を売り物にせずとも良い、と主張した。その一方で、花世は、処女を売らねばならなかった自分の不幸な境遇を嘆いていた。二人の異性と肉体関係を持ったことがある自分に理解を示し求婚してくれた春月に、感謝して尽くしたいと思う心理は、貞操を売った自分を卑下していたからに他ならない。

また、なぜ女性は美しくならねばならぬのか、そのことに花世は言及せず、始終、容姿にすぐれない自分を蔑んでいる。本来ならば、ペンで生きていこうと心を決めた文筆家に、外見が美しいか美しくないかは関係ないのではないか。作品の良し悪しでのみ、評価されるべきなのではないか。しかし、時代はまだそこまで進んではおらず、当時の文壇では、樋口一葉や長谷川時雨など＜絶世の美女＞と言われる人が多く、もてはやされていた。花世の外見コンプレックスは、花世自身の問題であると同時に、女性の美を商品化する社会の在り方の問題であったともいえよう。

進歩的な女性になりたいと格闘する反面で、伝統的な女としての感情を抱えた花世。結婚生活（あるいは共同生活）がはじまると、花世は、駆け出しの詩人で翻訳家であった春月を支え、春月に尽くした。金がなくて辞書が買えないとぼやく春月のために、自分の着物を質に入れる。花世が新聞記者をしながら家計を支え、春月は執筆に集中する。雑誌を刊行することになれば、花世が大半を出資する。春月の翻訳を花世が書き取る。ファンの若い女たちが押しかけるようになる。その女たちの面倒までみる。宮本（望月）百合子は「花世さんは世話をしすぎるんですよ」「春月さんにすっかりのめり込んでいて、ちょっと

---

<sup>37</sup> 『詩人の妻 生田花世』 34 頁

でも女のひとと口をきくのを許さない」「春月さんにとって家庭は地獄だったでしょうね」と辛辣だ<sup>38</sup>。

詩人として絶大な人気を誇るようになった春月は、次々と女を変え、絶え間なく浮名を流した。花世はその度に嫉妬に狂い、嘆き、怒る。髪をふり乱し夜中に春月を見つけるため友人宅を次々と訪れたりもした<sup>39</sup>。徳島の実家に帰ったこともあれば、死のうと三原山に登ったこともある<sup>40</sup>。しかし、花世は生き抜いた。花世は、春月の浮気たびに、それを自伝的小説の形で文芸誌に発表し、いわば春月とのスキャンダルを自作の糧として生き延びたのである。

『青鞥』の意思を引き継ぐ形で、女性の女性による文芸誌として発行された『女人藝術』創刊号（1928年）から連載された「獅子は抗しがたし—三角関係の一端より」が、その好例である<sup>41</sup>。この作品は、花世の小説集『燃ゆる頭』（1929年）に「獅子は抗しがたし—ある婦人の備忘録」として収録された、代表作のひとつだ。この短編は、日記の形式で、自分が目をかけて面倒をみていた若い女が、夫のSと浮気していることを知った、ある妻の話が、一人称で語られるものである。嫉妬にかられて食事もとれず、街を徘徊する妻の様子がつぶさに記録されている。嫉妬しまいとしても、感情は収まらない。「何といつても苦しいのは妻よ」と嘆き、「妻というは／いとあはれなる／名なりけり／かくおもひつゝ／苦しみに／耐ゆ」とうたいあげる。この感情のうねり。ここには体裁を保とうというような計算はまったく見られない。当時の読者すべてが、これは花世自身のことであり、小説中のSが春月だと知っているにもかかわらずである。さらに驚くべきは、春月の浮気騒動と、妻花世の苦しみの告白文ともいえるこの原稿を、春月は掲載前に読み助言していたという。この二人は夫婦であるというよりも、文学でつながり合った同志だった、ということなのであろうか。

ふたりの結婚生活、あるいは共同生活は、春月が船から瀬戸内海へ投身自殺をすることで終わりを告げる。1930年5月。春月は愛人に会いにでかけ、その旅先でひとり、暗い播磨灘へ飛びこむ。映画であれば、これで花世の不幸に終止符が打たれるのかもしれないが、現実はそうロマンティックには終わらない。花世は現場へ呼ばれて遺書を受け取る。新聞で人気詩人の自殺と女性問題が騒がれる。数日後、死体があがったと再度呼ばれ、火葬。遺族からは「内縁の妻」と非難され、春月の著作権をめぐってもめる。少し落ち着いたと思えば、春月

<sup>38</sup> 『断髪のマダモデール』126頁及び『女人藝術の世界』32頁。

<sup>39</sup> 『詩人の妻 生田花世』80-87頁

<sup>40</sup> 『わたしの生田花世像』70頁

<sup>41</sup> この作品については「『女人藝術』と生田花世—〈私語り〉とその文学的試み」（『彦根論叢』393号）にて論じたので、詳細は割愛する。

が死の直前に書いた、別の女との浮気体験を記した原稿が雑誌に掲載され、春月死後も春月の浮気に嫉妬する心が収まらない。現在では想像しにくいですが、春月は、当時、「日本の近代詩人の中で、その生前にこれほど民衆に親しまれ、愛された詩人は他に類例を見ない」と<sup>42</sup>、詩人室生犀星に言われるほどの人気詩人で、詩人萩原朔太郎は「生田〔春月〕君は僕の最愛無二の友人」と述べ<sup>43</sup>、春月の自殺に芥川龍之介の自殺時以上のショックを受けたというのだから、花世は「有名詩人の夫に愛人と逃げられ自殺された未亡人」として、世間の好奇の目にさらされたことだろう。

花世に残された春月の遺書には「今にして僕はやはりあなたを愛していることを知った。さらば幸福に」とあったが、これもその後長年にわたり、花世を悩ませた<sup>44</sup>。春月が女と心中するのではなく、ひとりで死んだこと。そして、「やはりあなたを愛していることを知った」という遺書。このふたつの事実は、花世を安堵させた。何人もの女と浮気しながら、最後に春月は花世という女に戻ってきたのだと。しかし、同時に、愛していると悟ったことが本心ならば「さらば幸福に」などと文末に添えて自殺するのではなく生きて戻ってくるはずだとも、花世は思う。花世はこの春月の言葉を素直に喜ばず、春月の死後も、春月の愛を信じられずに悩み続ける。さらに、春月の弟たちと春月作品の著作権についてもめたあげく、春月の遺稿をまとめて出版する作業に追われるなど（1931年11月全10巻完了）、花世は、いつまでも春月から逃れられない年月を送ることになる。

## V. 戦中・戦後

春月の死後翌年の1931年（昭和6年）、満州事変を機に、日本社会は戦争一色に染まってゆく。社会情勢の変化により、花世の執筆活動も体制を反映したものになる。花世は、多くの女性文芸誌に深くかかわった文筆家だった。『青鞥』では執筆するだけでなく、廃刊直前には事務一切を引き受けて『青鞥』刊行を支えた。1916年（大正5年）2月『青鞥』が廃刊になった後、花世は発起人のひとりとなり、『青鞥』の意思を引き継いだ『ピアトリス』（1916年7月－1917年4月）を発行。さらに「女性のための女性による」文芸誌として発行された『女人藝術』（1928年7月－1932年6月）では、創刊者の長谷川時雨の右腕となり、実務は花世が背負った。花世は一貫して、「女性のための文芸」につくし、女性誌の発行に携わり、女性執筆家たちの活動を支えた、いわば、縁の下の方

---

<sup>42</sup> 『詩人の妻』89頁

<sup>43</sup> 『生田春月追悼詩集 海図』に掲載された萩原朔太郎による「生田春月君に就いて」より（徳島県立文学書道館『生田花世展図録』14頁より転載）。

<sup>44</sup> 春月の死に関する花世の想いは、『未亡人』の第一章「未亡人といふ名」に詳しい。

持ち的存在であった。

しかし、戦争がすすむにつれ、文学表現も大きく制限されるようになる。『女人藝術』が廃刊に追いやられたのも、何度も発禁扱いにされたからであった。『女人藝術』の後続として創刊された『輝ク』（1933年4月－1941年11月）は、一号4頁という小さな冊子であったが、当時活躍していた女性文筆家すべての作品が載っていたと言っても過言ではないほど、豪華メンバーがそろった雑誌としてスタートした。今も文学史に名を残す多くの女性たち、詩人の永瀬清子、俳人の長谷川かな女や中村汀女、小説家の林芙美子、円地文子、平林たい子、森茉莉などが執筆した。花世は『輝ク』では、長谷川時雨追悼号に詩を寄せた程度で、その他には近状報告を載せる程度であったが、一員として活動した。このフェミニスト思想文芸誌ともいえる『輝ク』も、1937年（昭和12年）7月の日中戦争勃発から、手の平を返したように、戦争賛美、銃後支援一色になる<sup>45</sup>。

花世を含む当時の女性執筆家らは、戦時色強まる社会の中で1939年、「輝ク部隊」を結成。慰問特集を組み、毎号慰問袋の募集が載るようになり、皇軍賛美、兵士への激励、残った家族への励まし、良き日本の女とは銃後を守る女であると啓蒙するようになる。これらは「輝ク部隊」による、陸軍兵に女性の励ましを届ける女流前線慰問文集『輝ク部隊』（1940年1月1日刊行）、海軍兵への慰問文集『海の銃後』（同年同月刊行）、『海の勇士慰問文集』（1941年）につながってゆく。花世も、1938年10月号『輝ク』には「慰問袋持ち寄り会」の献納者として名を連ね、1939年9月には皇軍慰問、戦跡視察のため、南京、上海へと派遣されている。翌1940年には「日露国境」である樺太まで、「各所約十ヶ所にて働いてまゐります」と講演にでかけ1ヶ月滞在<sup>46</sup>、樺太の西海岸の国境に近いエストリという町から「此の人々は男も女もみな真剣で感動させられません」と近状を寄せた<sup>47</sup>。

戦時下、出版物が制限されていた当時の花世の出版物を並べると『銃後純情』（1940年）、文科省推薦図書に指定された『活かす隣組』（1941年）、『輝く人柱』（同）、『日本の娘』（1942年）、『海国女性史』（1943年）と、その出版物の多さに目を見張る。1940年から45年までの間に、計9冊。長谷川時雨の死の2年後、1943年に『一葉と時雨』を出版しているが、その他は、国家体制協力書ばかりだ。花世は「やる以上は、勝たなくちや…」「東洋平和」のために、と軍人会館出版の出版物にも執筆している<sup>48</sup>。『銃後純情』には、上海を視察したときの写真であろう、瓦礫の前にたつ花世の写真が収録され、その横に「陸軍省情報部

<sup>45</sup> 尾形明子「解説」2頁（復刻版『輝ク』不二出版）

<sup>46</sup> 『輝ク』（昭和15年9月号）

<sup>47</sup> 『輝ク』（昭和15年10月号）

<sup>48</sup> 生田花世「支那事変記念の日誓う」『銃後純情』370頁

陸軍少佐」の西原龍夫による「序」が捧げられた。

「支那事変のはじまる半年ほどまへ、ある雑誌から『戦争がもしあつたら、あなたは何で、国家に盡しますか』と返答を求められ」「多年文筆に従事して居りますから、やはり、ペンで、お役に立ちたいと存じます」と答えた花世は<sup>49</sup>、その言葉通り、ペンで国家体制に協力する形となったのだ。

この事実を「汚点」と非難することは簡単だろうが<sup>50</sup>、果たしてこれは花世だけの問題なのだろうか。「君死にたまふことなかれ」の反戦詩で有名な与謝野晶子にも戦争賛美詩歌がいくつもある。平塚らいてうも、長谷川時雨も、みな戦争に踊らされた。時雨の妹の長谷川春子（1895 - 1967）や林芙美子は、従軍として戦線までかけて戦争協力作品を残した。花世の戦時下の作品も、同様の流れの中に位置する。

皆が書いていたのだから花世が書いているのも当然である、と花世を弁護するつもりはないが、これを花世の個人的な汚点であり、この汚点がゆえに、戦後、花世の評価が低いという批評にも抵抗を感じる。もし戦争協力詩を書き体制に加担したことが汚点として認識され非難されるのであれば、与謝野晶子の評価が高いままなのはなぜなのか、説明がつかないのではないだろうか<sup>51</sup>。

花世の戦中作品には、反戦精神はなく、体制への批判や疑問もまったく感じられない。しかし花世作品のなかには、「うまやにもしめゆひまはし国のため／いでたちしものの命いのりて」にみられるように、「国のため」に戦地へ向かう兵隊のひとりひとりの「命をいのる」心が根底に流れているように思われるものも多い。純粋に太平洋戦争をアジア解放のための聖戦だと信じていたからといって罪が軽くなるわけでもなく、文筆家、知識人のひとりとして、銃後の日本の女の規範を宣伝したことに対する批判は免れない。しかし、だからといって、花世の戦時下の作品の存在を無視して花世を語ったり、戦争協力書だけをクローズアップして花世を批判したりすることも、疑問視されるべきである。

具体例をみてみたい。1938年に発表された花世の「村訃」は、戦争をモチーフにした詩だが、「名誉の戦死だぞ えらいんだぞと／ぞつとしてゐる学童たち

<sup>49</sup> 「国民の感激」（『銃後純情』159頁）

<sup>50</sup> 小林美恵子は、花世の戦時下の執筆について「汚点」とし、「この戦時下の汚点は、戦後、花世に執筆の場を失わせ、晩年の彼女の人生をいっそう寂しいものにしたようだ」と結論付けている（ゆまに書房復刻版の「解説『銃後純情』『海国女性史』（抄）生田花世著」6頁）。

<sup>51</sup> 戦時下で戦争協力詩を書かなかった詩人のほうが、書いた詩人よりも圧倒的に少ない事実に加え、高村光太郎や三好達治など、率先して戦争協力・賛美詩を書いた詩人たちの評価が戦後も高いままであることに鑑みても、「戦争協力詩を書いた」こと（だけ）が必ずしも戦後の文学活動の制限になったとは限らず、評価を低くした要因になるともいえない。

が／その母親に帽子をとつて次々に敬礼する」と、中国へ送り出されて死んでゆく少年兵たちに涙する村人の様子が描かれている。また、同年の散文「軍国の母の祈り」では、我が子の戦死を望む母の心理について「およそ、どんな母でも、我子の死をのぞむものはない、その手がなくなり、その足がきれ、両眼がつぶれるのを喜べるものは一人だつてない」と率直に述べた上で母とはいつでも我が子の「いいこと」を祈るものであるから、その「いいこと」が名誉の「戦死」である場合には、それを望むものだと説く<sup>52</sup>。

1940年出版の『現代女流詩人集』には「出征船」、外地慰問体験を基盤にした「支那より帰りて」「支那の春を思ふ」、南京を舞台にした「龍」等が掲載されたが、そこには、日本兵に手を振りながら、「元気でゐたと云つてあげます／日本の国にかへつたら／日本の風のその中で／大きい声で云ひませう」と、故郷を懐かしむ日本兵の心、そして故郷にいる家族の心を思いやる花世の素直な気持ちが滲んでいる。1944年10月、敗戦色の強くなる頃に出版された『詩集 大東亜』に掲載された詩「大連の星が浦で」では、「日本人はえらいです」と語る大連の人に、「あの人々は行きますと云つて／飛行機上の人となりました。／では行つてまゐりますと／云はなかつたその心の中／分かりますか」と問いかける「私」が描かれる。これらの詩には、戦死を賛美する心はみられない。また、花世は、随筆にて、負傷して帰還する兵士を大切にしよう、戦中、何度も呼びかけている。また、戦死者の家の女たちを助けることの大切さも訴えている。ここには、愛国主義や体制協力という以前に、花世の行動の根底に常に流れていた、人の不幸に呼応し、人に尽くしたいという気持ちがあったといえまいか。

花世は、敗戦直前の5月25日の夜、世田谷で空襲にあい家財を喪失、焼け出される。友人宅の一室を借りて暮らしはじめた花世は、敗戦2カ月後、「詩や歌をしたい人はどうぞ」と書いた板を掲げる<sup>53</sup>。戦争でろくに勉強できなかった若い女性たちが次第に集まり、花世は『万葉集』などを講じ始める。この行動力はいかにも花世らしい。どんなときにも文学から離れない執念ともいえる情熱。そして「女性のために」という使命感にも似た情熱。これが花世が「情熱の人」と形容される所以でもあろう。花世の死後発見された詩稿から、当時の心境をあらわしていると思われる、花世の「自画像」を引用したい<sup>54</sup>。

青い菜も凍り

<sup>52</sup> 花世著「軍国の母の祈り」47-49頁より引用。

<sup>53</sup> 徳島県立文学書道館発行の『生田花世展図録』収録の年表に、看板を掲げるように助言したのは、戦争賛美詩で活躍した詩人の竹内てるよだと言及されている(22頁)が、出典の確認が取れない。

<sup>54</sup> 生田花世の会員で花世の評伝を初めて記した和田艶子が発見したもの。『鎮魂』74-75頁参照。

白い菊の花も凍り  
冷戦をこへて  
冬の朝日は東方に輝く

亡くなった老女の  
形見のモンペをはいて  
今日も私は  
荒涼の大都を歩かう

どんなものでも見るぞ  
どんなことでものりこへるぞと  
経験を歓迎する気象があつて  
私の生きてゐるのは奇蹟だー

空襲のショックから立ち直れずに長編は書けないと思っていた花世だが、敗戦後4年、1949年5月には、自分の未亡人としての苦勞と苦悩が、敗戦後の日本社会にあふれた未亡人たちの参考と励みになればとの想いから、『未亡人』を執筆<sup>55</sup>。自分の悲惨な体験を人のため、特に女性を助けるために伝えたい、という気持ちは、「食べることと貞操と」を書いた頃と決して変わらなかった。この時、花世は60歳を過ぎていた。

## VI. 晩年

多作だった花世であるが、『未亡人』以降、花世に大きな著作はみられない。とはいえ、文学と縁を切ったわけでは決してなかった。戦後に始めた詩歌教室は「松花塾」となり生徒を増やした。主婦らを集めた小さな読書会も始めた。その輪が広がり、1953年に主婦グループを対象にした『源氏物語』の講義を依頼されることになる。これが、「生田源氏」と言われ、300とも400人ともいわれるファンを持つことになった、花世の源氏物語の講義である。聴衆となったグループは30にもわたり、PTAなどの集まりを中心とした主婦が多かったという。生田源氏の会は、1970年末の花世の死まで、休むことなく続けられた。

生田源氏の会のファンにはどこか熱狂的なものがある。晩年の花世に、なにか女性を熱狂させる魅力があったということなのであろう。花世が高血圧で倒れたときには、是非とも花世を自宅へ迎えたいと何人もの会員が申し出たとい

---

<sup>55</sup>『未亡人』の「あとがき」より。

う<sup>56</sup>。80歳を過ぎた花世を案じ花世のために歌碑を建てたのも、花世の残した原稿と貯金を使って『生田花世詩歌全集』を出したのも、生田源氏の会であった。花世の死の翌年、花世の評伝が初めて出版されるが、これも、生田源氏の会員として「生田先生」を敬愛し、昭和女子大学同窓会の初代会長を務め、同大の名誉理事でもあった和田艶子（1904－1999）によるものであった。

甥の西崎靖によると、外見は相変わらず、「背は小さく、うす汚れた着物をきて」「だれがみても変な婆さん」としか見えなかった花世<sup>57</sup>。講演先で迷い込んだ物乞いと間違えられたという逸話まで残る花世。『源氏物語』の講義で、400名もの女性を魅了しつづけた晩年の花世。和田が指摘するように、「女の苦しみを生き抜いて先生の到達した思想が、私達の生田源氏の源泉」であり、体験者の言葉であったからこそ、多くの女性が魅了されたのであろう。

原稿が入った風呂敷や紙袋が窓も開かないほどつみ重なったアパートの4畳の部屋が、花世の晩年の住処であった。入院先の病院も墓も、自分で準備していたという。花世の原点は文学への情熱であり、花世は執念を持って、ひとりの女性として、文学とともに、正直に生きて、生き抜いた。享年83歳。花世の葬儀には、明治、大正、戦前、戦中、戦後を生き抜いた同志、平塚らいてうや深尾須磨子から、花世を悼む言葉や詩が贈られた。

## VII. むすびにかえて

花世にとって文学とは「言葉の戯れ」ではなく、実際の人生で体験した「心身を焚くであろうところのその記録」であり、身をもって体験した女性としての苦悩を作品を通して分かち合うことで「なほも不自由に」生きる女性らを奮い立たせるものであった<sup>58</sup>。人間花世としての幸と不幸のすべてが、文学者花世にとって必要不可欠な体験として活かされた。

自由の梨を私は食べた  
山みちに腰をおろして  
繁みより繁みをひたす  
水の光はとらはれず

ざぶざぶとあまいつゆが  
咽喉で波立つ大梨を

<sup>56</sup> 『生田花世讀本』281頁

<sup>57</sup> 『別冊 生田花世讀本』9頁

<sup>58</sup> 生田花世著「女性の詩的精神」『詩神』（昭和5年5巻1号）

兎や猿のするやうに  
食ひたいように食つた  
水になげやる黒いたね  
草になげこむ白いかす  
風は箒か 松超えて  
秋の日向を掃きとほす

もしも私が元気な女で  
生き生きしている気象なら  
自由の梨をたべたがため  
お伽話でをかしいか。

ほんとの梨の味はせぬ  
お上品な婦人の客間の  
銀の盆の梨ひとつ  
ナイフではそくたべるとき

(生田花世「自由の梨」1930年『詩神』第6巻第1号発表)

「女は女であることの不自由から解放され、自由に生きるべきだ」という花世の悲願は、現在の日本社会で達成されているか。花世文学は我々に問いかけているのかもしれない。

## <主要参考文献>

生田花世『銃後純情・海国女性史（抄）』高良留美子・岩見照代（編）『女性の  
みた近代 II 女と戦争』ゆまに書房、2004年

生田花世の会（編）『生田花世讀本』『別冊 生田花世讀本』1996年

『生田花世展図録—生誕 120年記念生田花世展～真をしたひて～』徳島県立文  
学書道館、2008年

尾形明子『女人芸術の世界—長谷川時雨とその周辺』ドメス出版、1993年

尾形ゆき江『わたしの生田花世像』山脈叢書、1981年

『「青鞆」人物事典—110人の群像—』大修館書店、2001年

戸田房子『詩人の妻 生田花世』新潮社、1986年

『日本女性詩集（1930—1943年）』第1巻、2巻、付録（編集復刻版）不二出版、  
2014年

森まゆみ『断髪のマダンガール』文春文庫、2010年

和田艶子『鎮魂 生田花世の生涯』大空社、1995年（初版1971年）

その他、復刻版女性誌『青鞆』『女人藝術』『輝ク』等。